佐伯藩の文学

毛利壺邱と瀧川利雍 ①

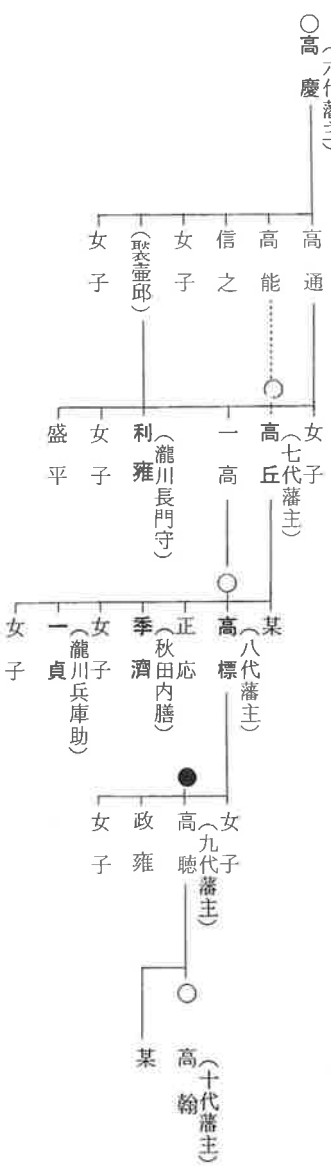
勝間田三千夫
（会員・佐伯市中村北町）

人の生きた証として遺された香り高い足跡、それを文化遺産として後世へ伝えていきたい。その足跡に魅せられて佐伯藩歴代藩主の記述に取り組んでいる。

いま寛政の文学三侯毛利高標侯伝（仮称）に暫し筆を停めて藩文学の学父ともいうべき毛利壺邱の存在を改めて見直し、筆を取った次第である。

今回は、佐伯藩歴代の中より六代藩主毛利高慶の嫡子並びに子孫の足跡を見ることにした。

本史を容易にするため次に系図を示す。



。嫡子助十郎高通

元禄十六年（一七〇三）生まる。

享保二年（一七一七）二月十五日有徳院殿（吉宗）に拝謁　十五歳。

同年十二月二十一日定期叙爵従五位下摂津守に叙任。

同四年四月二十六日病弱籠居の身となり廃嫡す。

同十八年七月二十三日佐伯に没す。三十一歳。

。大八郎高能

宝永三年（一七〇六）生まる。

享保四年（一七一九）四月二十六日十三歳の時、兄高通廃嫡を受けて嫡子となる。

同十四年二月十五日有徳院殿に見参奉る。

同十五年十二月十八日定期叙爵従五位下大和守に叙任。二十四歳。

元文五年（一七四〇）正月二十四日父に先立ち卒す。三十四歳。

内室は松平玄藩頭忠瞭の女。

。主計信之

南部縫殿信尹の養子

。女　子

下野足利藩主忠位の子戸田大炊頭忠言の室。この忠言は享保十二年（一七二七）に生まれ、玄蕃と称す。元文元年（一七三六）十月遺領を継ぐ。時に十歳。寛保二年（一七四二）四月十八日将軍家綱に謁す。同年十二月従五位下大炊頭に叙任。延享二年（一七四五）十一月大阪定番を勤む。明和元年（一七六四）六月奏者番に転ず。同二年十月長門守に改む。安永三年十二月十四日没す。四十八歳。

。（毛利壷邸）　後述

。女　子

大久保宗三郎教純の室。後離嫁巨勢日向守

以上、『寛政重修諸家譜』に『徳川実記』を補足して

みたもので、それは、本論との関わりの中で、七代藩主がなぜ孫の高丘となったかを知るためのものである。以て系図ゴチック体の人物について見ていきたい。

一　毛利壷邱

佐伯藩六代藩主毛利高慶侯の四男褧は、享保十五年（一七三〇）江戸藩邸に生まれた。名は褧（一書に褧とも）、初め泰高・義方・字は公錦、通称図書、また、兵庫頭、号は壷邱・扶揺子・南豊というが、世に泰扶揺・扶揺公子の名で、文人の間に聞こえた人である。学統は荻生徂徠の学問護園派（徂徠の号）に属し、徂徠の高弟宇佐美灊水・大内熊耳に師事し、その高足として文辞を以って東都に知られた人である。後、毛利を出て水戸家の臣徳川氏の老職山野辺兵庫頭義胤の養子となり、山野辺義方、また、山野辺図書と称された。が、後、毛利家に帰家してからは森姓を継ぎ、森図書と称した。この毛利家に復帰した事由について某書は次のように述べている。「山野辺家で故ありて家に帰る」また「山野辺家の実子成長するに及んで家へ帰る」とある。しかし、この表現には事実が秘事されているのではないか、だとすれば敢えて伏す事由はなぜだろうか。数百年を経た今日、歴史としてその史実に一歩なりとも前進したい（後述）

天明六年（一七八六）七月十一日、五十七歳の生涯を閉じた時の著書に、楽律考六巻・経済考・芸術考・壷邱詩稿三十巻・壷邱文稿二十巻・雑事考・車服考・書籍考八巻・制度考十巻・銭帛考・扶揺園筆録二十巻・礼法考（続近著）がある。

以上のことは、誰もが小伝的に知るところであろう。

さて、当時の学派を見ると、元禄の前後に京都に出て古学を唱道する伊藤仁斉の堀河学派と江戸において古文辞学を唱える荻生徂徠の護園学派があり、東西両者が最も盛大を極めて門流天下にあまねき、爾来数十年にわたって学界を指導せられたと言われ、これらの諸学派は互いに相争いつつ共に朱子学に反対して好んで異説を立て明和・安永のころには折衷学を立てるに及ぶという。この諸学林立する学界を憂い、幕府は執政として治国に要するは人心を正しくするに在りと、それは聖賢の道を学ぶにありとなし、天明七年六月松平定信が老中職就任するに及んで、文教革新の大任をなした。その一つ、大い

に学問を奨励して怠らざらしむること。二つに学問の方針を明示して迷はざらしむることであった。

幕府は、国学に朱子学を重んじていた。その朱子学が諸学横行によって危惧されるところに改革の意図があり政治的圧力が加えられたものと思われ、また学問に見識の深い老中には、上下を問わず学問に向わしむる意図のもと、正に機が熟した時でもあったか、ここに門戸開放の道は開かれていった。

殊に天明時代に於ける旗本諸士は無学無識であったと言われ、それを戒めて学問に向わしめられている。また、文武修養の緊要を諭され、武芸者・学問の師範を録上させた。天明七年七月晦の「師範調査」がそれであり、それによると、

「此月文学並軍学・天文学より凡て武芸の師たる者の姓名・流名・年齢・居所等委しく記し出すべしと触らる」（徳川実紀）。

と、師範の拡充を図っている。

また聖堂に於ける講学の日を定め、一般有司に聴講の機会を与え、学問を諸役人登用の必須用件となした。学問師範には、昌平校の内容充実を意図して最有力を用いる事とし、有徳碩学を全国に求め、その教授となる道を開き、天明八年正月には讃岐高松の人柴野栗山を、寛政元年九月には江戸の人岡田寒泉を、同三年九月には伊予川江の人尾藤二洲を挙用した。

学問の方針は、寛政異学の禁制で、ご存じのように、湯島聖堂（官学）での講義は朱子学に限られ、そして、この門戸開放によって旗本の士のみならず諸藩士並びにその子弟が昌平校に入学し、学問を修むる者も出て、その数は大いに増加し、文運は隆々とした。

かくして、上の官学下これに倣い、朱子学は諸藩の藩校へと波及していったのである。しかし、決して幕府の強制によるものではなかったようである。中でも藩学は儒学を重んじ、儒学は朱子学を旨とする藩も多く、また藩主並びに儒臣の如何によって古学を奉ずるもの、建学より一貫して一学派に終始するもの、折衷学派に従するもの、朱子学より蘐園派に転ずるもの、蘐園派を改め朱子学へ転ずるものと一様ではなかったようである。

以上は、学派学説史を概観した似すぎないが、盛大極める蘐園の学問をしたのが壷邱であった。この荻生徂徠の蘐園学派の護とは「茅」のことで、徂徠の学塾が日本

橋茅場町にあったからこれをもって号とした（『日本南画史』）とある。また護園学派の流れを汲む門下は、儒学研究から詩文（作）にも余力を示した。

では、壷邸は何時東上したのか、前述したように、享保十五年に江戸藩邸に生まれている。いま寛永十二年（一六三五）の武家諸法度を見れば、その第二条に大名小名江戸交代所の定めによって参勤交代制度が確立されている。

「各自邸宅を置き妻子を常駐せしめ、隔年に躬を江戸に覲して公務に服従す。これ不変の制なり」

と、爾来文久二年（一八六二）に至るまで参勤の時節交代の変動は令せられたものの殆んど不変であったようである。

こうした幕府統制下にあって、享保十五年十月十七日江戸に生をなした壷邸であった。元文四年（一七三九）六月十三日九歳の時、父六代藩主毛利周防守高慶は参勤して服従した。しかし、高慶には最後の参勤となった。寛保二年五月十五日高慶（六十八歳）は在封で致仕を願い出た。為に幕府は目付本多大学紀智に暇下され、豊後国佐伯の城に遣わした。同年八月七日高慶は退休の身となり、その後継には、嫡男は父に先立ったため、嫡孫（嫡子高通の子）寅太郎高丘に所領二万石を襲しめた。時に十五歳。家督相続諸事万端を整えた目付本多紀智は同年八月十一日有徳院に拝謁した。よって高丘は、延享元年（一七四四）二月十五日はじめて有徳院殿にまみえ奉り、同二年十月十八日定期叙爵により従五位下周防守に任ぜられた。

寛保三年（一七四三）九月十三日高慶は六十九歳の生涯を佐伯に閉じた。同年十月十一日幕府は在府万石以上の領地に朱印判物を授与された時、毛利周防守高丘は御座所にて授与されて後、西城にも出仕して謝し、宿老・小老の邸にも廻拝した。

さて、藩主交代の時、壷邸は十三歳であった。この十三年間の動静については、資料不足のため明らかにすることは出来ないが、「母は某氏」とあるところから側室の生まれである。また、後述する徂徠門の兄弟子大竹東海（岳太仲・岳融）の書した壷邸の碑文によると、宝暦七年頃東上したことになる。しかし、この年四月六日に

水戸家の臣徳川氏の老職山野辺兵庫頭義胤の養子となっている。もし、この両者が時を同じくして前後したとするならば、その間二十七歳まで佐伯に居たと単純に見ることが出来るだろうか。そして、あの文辞を以って東都に知られる程の学識の基礎が、藩の学習所を通してなされたものであろうか。勿論、父高慶は文武を奨励し、学問に意欲を示す好学の人であったが、汗牛充棟する書籍はなかったろう。また、この年齢まで全く面識もなく、藩主の子ということで縁談があったのか。

『佐伯市史』によると、壷邸は佐伯城内に生まれ、生母奥井氏の女志幾子（側室）は出産後死亡したとある。また、壷邸は、元文三年二月八歳のとき、父高慶の供をして入津浦の狩山に狩猟する程銃を能くしたとある。なお、父高慶が没した寛保三年は十三歳で、佐伯城内に住んでいたが、いつ江戸に行ったかはっきりしないとしている。

この出生地については、前述の参勤交代制度により、妻子は江戸の屋敷から他国へ出る事は禁じられていた。よって藩邸下屋敷芝白かね（目黒か）が住まいであった因に壷邸が生まれる前年（享保十四年）は父高慶参勤の年であり、二月八日参門公卿の館伴を命ぜられ「法皇使は毛利周防守高慶奉る」（日記）とある。なお、この側室については一考を要するがここでは省略したい。

次に壷邸八歳の元文三年は父高慶在封の時であるから親子で狩猟の一時を過ごしたことであろう。その後父高慶が佐伯に没した寛保三年まで、壷邸は十三歳まで佐伯に在ったというのであるが、もし、この歳まで佐伯に在ったとするならば、今しばらく城内に居宅をもって住んでいたと考察したい。そして、東上の時期は寛保二年（一七四二）八月七日、七代藩主となった高丘が、七年後寛延二年正月二十七日「公卿の館伴院使を奉る」を勤め、その暇を給い、同年四月十五日に封地へ帰藩している。これは、高丘がはじめての領地への帰藩であった。江戸を知らない壷邸ならば、二人は初対面ということになる。高丘は二歳上の甥であり、壷邸は二歳下の叔父の間柄である。

後、高丘が江戸藩邸へ上るとき壷邸も同道したものと推察することは出来ないか。そして、高丘がかって住んでいた下屋敷芝白かね邸に住んだと思うのである。時に壷邸十九歳ごろということになろう。

是よりして、当時私塾には向学の年齢はなかったと思われる。荻生徂徠の門を叩いたとしても、世に知られる人材となるには十分である。

以上、壷邱の東上に関して確かな資料がないため、一地方史の一部分を柱にして敢えてこだわってみたが、これでもまだ疑問は残るところである。もし、江戸で出生して江戸に育ったならば、前述した憶測めいた考察の部分を再考察しなければならないことはいうまでもない。

以下、筆者は、壷邱が江戸に生まれ、江戸に育って、そして、学問の道を歩んだ足跡を見ることにする。

壷邱は学問を復古学派荻生徂徠の高足大内熊耳・宇佐美灊水に師事した。殊に大内熊耳の門弟で比肩する兄弟子に大竹東海（岳太仲・岳融）・大内蘭室や田中江南等がいた。そして、壷邱の弟弟子に十四歳下の立原翠軒がいた。彼等は皆熊耳先生の高足であり、共に切磋の中にあって、壷邱もまた文辞をもって東都に知られる人になったのである。この立原翠軒は水戸の人で、後述（小伝）のとおり後、水戸史館総裁に任ぜられた人であるが、壷邱とは特に交を深くした人である。壷邱が後、毛利を出て、宝暦七年四月六日水戸家の臣徳川氏の老職山野辺兵庫頭義胤の養子に望まれた時、そこには学問が重んじられ、立原翠軒の介するところもあったのではないかと察するのである。

かくして壷邱は、二十七歳で山野辺家の養子となって文士の間には山野辺図書、また義方で知られていた。

いま、壷邱が属する護園学派の高足であり、壷邱の師である二人についてみる。

大内熊耳　名は承裕、字は子綽。通称忠太夫、号は熊耳。元禄十年（一六九七）陸奥国田村三春に生まれた。本姓は余、百済の王室の後裔といわれる。はじめ秋元濬園に学び、のち荻生徂徠に学んで、ついで、京に至って伊藤東涯に見え、ついに長崎に赴き、とどまって講説した。江戸に帰って後、服部南郭の指導を受けて文名が高まった。後、肥前唐津侯の儒臣となる（以下略）

（大人名事典）

宇佐美灊水　名は恵、字は子迪。通称恵助、号は灊水・優遊館。姓を修めて宇とした。上総

国夷隅郡の人。宝永七年（一七一〇）正月二十三日に生まれた。十七歳の時江戸に出て、荻生徂徠の家の若党となったが、まだ学問を受けないうち、徂徠が没し、とどまって社友と切磋した。江戸に在って講説を業としたが、のち松江藩の儒臣となった。篤く徂徠を信じ、力を尽くしてその遺著を校刻した（以下略）

（大人名事典）

また、切磋の中にあった立原翠軒についてみると、

立原翠軒　字は伯時、通称甚五郎。号は翠軒・東里此君堂。水戸に生まれた。延享元年（一七四四）から文政六年（一八二二）まで学問一筋に生きる。八十歳。

童子の時より読書を好み、初め同藩士谷田部藤八郎に就学し、長じて文章を徂徠の門下大内熊耳に学び、また、細井平洲に唐音を修め、嶄然頭角を露し、章句の学を為す。宝暦十三年（一七六三）二十歳にして史館に入った。しかし、田中江南に師事して宋学を主とする江南古学を唱えたがため、これが異学徒と目され、沈滞すること十余年。しかし、翠軒敢えてこれを意せず、益々力を芸苑に専らにし、名は愈々高まるに至り、天明六年（一七八六）四十三歳にして遂に史館総裁に任ぜられ、享和二年（一八〇二）六十歳にして職を辞すまで史館に在ること四十有余年、総裁として一藩の文権を握ること十有八年。

致仕して翠軒と号し、江戸の藩邸に住まいし、悠々自適の生活を送っていたところ、海内の士、その名を聞き、書を求め益を請ふ者日々に増した。人を教には務めて該博を要し、各々の其の長所に因て之を成育す。よって英機の士多くその門出たという。

天明七年には老中松平定信に「天下の三大患（朝鮮使聘礼の事・北夷の事・一向宗の事）」について上書を提出した。

翠軒は詩文に長じたのみならず、文人としての趣味も豊かで、書・画・篆・七弦琴にも長じ、特に能書家として知られた（漢学者伝記集成・大人物事典）

壷邱は水戸藩士に列し、公務に精勤することとなった。

宝暦九年には長男利済が生まれた。壷邱二十九歳頃の子である。その利済については後述するが、壷邱はそれから間もなく毛利家に復帰している。とはいえ、確たる資料はなく、考察に過ぎないが、その時期を検討してみることにしたい。そこで、今一度『佐伯市史』に見るとこの時期を安永六年七月頃と推測している。だとすれば壷邱四十七歳頃まで山野辺家に在ったことになるが、前述の系図に示すとおり壷邱には長男利済の外に女と二男盛平がいる。この二人について見ると、まず、長女は片桐且元の弟貞隆が別門片桐家の六代貞芳の継室となっている。この貞芳は元文五年（一七四〇）に生まれ、寛延三年（一七五〇）に十一歳で遺領を継ぎ、天明七年（一七八七）に致仕している。四十七歳。従って女が五年後の明和元年（一七六四）に生まれたと仮定したとき、安永六年は十四歳である。片桐家の系図によると「毛利周防守高慶の四男森図書裟の女」とあり、森姓が使われているが、継室となったのは後の年であろう。

二男盛平について見ると、盛平は近江国蒲生郡関盛有の養子となっている。寛政五年（一七九三）十二月二十一日二十一歳で家を継ぎ、采地五千石を領した。生誕は逆算して明和八年（一七七一）頃になる。系図には「毛利周防守高慶の四男森図書裟の男」と同じくしている。

今一つ考察に値する資料があるので、それについて見ることにする。

後に水戸藩の碩儒となった立原翠軒が、藩学を執る中に水戸藩士で小宮山楓軒という子弟がいた。この小宮山楓軒は頴才で、殊に翠軒の学を傾倒し、師事した人である。時に十五歳で、翠軒三十五歳、壷邱四十九歳の時である。壷邱は既に扶揺公子の名で東都に知られていた時であった。その小宮山楓軒が、後、文化十三年夏六月に著わした『懐宝日札』の記筆によって壷邱がいかに学問を能くしたか、また、翠軒との交わりの深かったこと、そして、壷邱が毛利家へ復帰された事由の一因を知ることができよう。

その全文のうち一部を匿情して示すことにする。

「山野辺図書は佐伯侯（高慶）の子、来て山野辺兵庫頭の養子となる。其人、楽を好み、詩を善くす。所謂扶揺公子なるものなり、水戸に在て、その近臣皆楽を肆ひ詩を賦す。然りとも其人放縦にして検束なく、我意事を行ふ、其幼児死するとき、其乳母を怒り、。。。。。するのない、自ら刑をお行ふものなどありし故、兵庫頭義胤絶して実家に帰したり。故に当時命ぜられし大寄合頭百人扶持も召上げられたり。「其時図書翠軒先生に云へるは、予罪あるゆへを知らず、子、試にこれを云へ、時に先生未だ少年なりしが、筆札を以答えて曰く「君罪あるゆへを知らず、是罪を得るゆえんなり」と、図書初めて伏す今の瀧川長門守は其子なり」と。

この記筆に偲ぶとき、壷邸は没して二十年、漢学史上の人物として後世に名を為している。また「その近臣、楽・詩を賦す」とは毛利家血族の臣を指すものであり、後述するので省略するが、翠軒は学問に秀出した人物として高く評している。壷邸は学問には秀出しているが、わがままな性格であり、当主として法政的世務に忠誠を尽くされぬ自己中心的な人であったようである。宝暦九年長子利済が生まれ、生死の境を彷とき、乳母の看護に怒りをもってか手をあげるなどあって、耐えかねた義胤は絶縁したのである。また、翠軒が筆札を以て答えたのは、三十歳の壷邸に対しての学問の教えであった。

従って、壷邸は幾許もなく山野辺家を去り、毛利家に復帰し、家号を旧に復して森図書と改められたものと思われる。また、長子利済も父に従い、父の好学に倣って学問の道を歩み、長じて、天明五年瀧川一貞の養子となったのである。瀧川家の系図によると「実は毛利周防守高慶が四男森図書裘が男」とあって、この出自書の下りは三子ともに同じである。この利済の母が青柳氏となっていることからすると、女も二男盛平も、母は青柳氏と推察されなければなるまい。それについては次のように考えられるからである。当時、山野辺家には世継がなく青柳氏の女を養女としておいて壷邸を養子に迎えたか、また壷邸を養子に迎えたうえで青柳氏の女を嫁に迎えたか、ともあれこの不正事によって夫婦・子ともに山野辺家を去ったと推察されるのである。

因に、安永六年といえば、毛利高標が八代藩主となって十七年目の時である。この年、かつて六代藩主高慶が

開設した学問所を改め、藩校「四教堂」とし、その校舎となったのが毛利扶揺の旧宅といわれている。

『淡窓日記』によると、寛政七年（一七九五）に、淡窓十四歳が、佐伯に在った師松下筑陰を訪ねた時の事を懐旧して次のように言っている。

「城内入りて左に学校あり。四教堂という。これは、今の佐伯侯（高標）の叔父扶揺公子という人あり。熊耳先生の門人にして有名な文人なり。其旧宅を以て学校とせしものなり。松下の宅は其隣にあり云々」と。

これからすれば、この年以前に、壷邸の居宅は城内に在った。この年、壷邸は四十七八歳である。幼少のころ、佐伯に住していた時の宅か、何れにせよ佐伯に在ったことは確かである。好学の高標は、壷邸の学問を藩学の学父と高きに奉り、藩士並びにその子弟に向学ならしむる意図があったか。

かくして壷邸は、森姓に復しながらも学問の道一途に大内熊耳・宇佐美灌水の薫陶と、その高足大竹東海・大内蘭室等比肩する門人と切磋し、東都に聞こえる人となり、晩年に至るまで数多の著作をなし遂げたのである。

しかし、そのすべての著書が我々の近辺にないのが残念であるが、その著書の中に楽律考がある。それは壷邸が音律にも精していたからで、その事は十五歳上の浦上玉堂との交渉の深かったことから知られるのである。その史的資料の不足から多くの足跡を知ることは出来ないが壷邸が五十四歳の天明三年（一七八三）に、浦上玉堂三十九歳の重陽に『玉堂琴譜』を著わした。その序文をなしたことが、浦上玉堂年譜（脇田秀太郎編）に知れるのである。それによると「毛利扶揺『玉堂年譜』の序を書く」とあり、表紙裏に「玉堂先生著、玉堂蔵書琴譜、寛政改元鐫、皇都書肆玉樹堂・芸香堂」を、次に九枚にわたって毛利扶揺・赤松滄洲・皆川湛園の序文がある。この交わりは、立原翠軒と浦上玉堂の交わりの深さから生まれたものであった。

また、扶揺には『壷邸詩稿』の著がある。その二編巻一に「春尽遡墨沱・過別紀君輔」と題する一首を見ると

「朝臨南浦渚。彼美跛相望。伊人歌将帰。宛在水一方
我将摘揺華。卯以問行装。撃汰遡墨沱。夕繋鑣河梁。
揚柳連客舎。飄絮紛通荘。相逢一把袂。涙下灑離觴。
君有嶧桐琴。可以慰中腸。遊子吟何悲。激烈心内傷。

崦嵫漸移晷。恨恨辞高堂。屏営未上舟。執手芳洲傍。
人如留帰客。我似還家郷。願沿此春流。西溟倶遠航」

と。

同じく巻三に「春日遊含輝亭。紀君輔弾琴賦贈」の一首がある。

「一晤空亭上。相知旧侶同。江花薫酒榼。嶽雪照緑桐
逐臭幽蘭合。移情流水通。曲中無限意。挙目送帰鴻」

と。

しかし、この両首の成った年は明らかでないが、琴譜の序文の作られた天明三年の作とみられている。また、音律に関する書に、唐音歌笛譜一巻・南重操一巻・滄浪歌一巻「天明癸卯南愛滕裝撰」があって、同じく天明三年の作品で支那の歌行を唐音（中国語）によって節附された雅楽といわれている。なお、この作品が著書に明にされていないことからみると、『楽律考六巻』の中に録されていると推察する。

次号に続く

表紙解説

薩摩国分寺跡

鹿児島県川内市

三重塔層塔（三重部分の笠と相輪欠）

推定鎌倉期

天平十三年（七四一）日本六十四余州の国毎に建てられたお寺の一つで、いつ落慶したか年代は不明であるが、発掘された古瓦の文様型式から奈良時代後期であろうと推定されている。

此の三重層塔は南大門跡のすぐ右側に石造品の集めた所がある、その中に二基ぽつねん建っている、各層毎長方形に彫りくぼめられその中に仏菩薩が浮彫りされている、塔全体は傷みがひどく完全な層はないものの、大隅国分寺跡近くにある隼人塚を小型にしたような塔で、各所に入念な鑿の跡が残されており造立当時はさぞ見事な塔であっであろうと想像する。

塔高・現状約一米五十糎

写真並びに説明　軸丸　勇